

丹比真人笠麻呂、筑紫国に下る時に、作る歌

一首 并せて短歌

五〇九番

臣おみの女めの くしげにの乗れる 鏡かがみなす 三津みつの浜はま辺へに さに
つらふ 紐ひもと解とき放さけず 我わ妹子もこに 恋こひつつをらば 明あけ
晩くれの 朝あさ霧ぎりごもり 鳴なく鶴たつの 音ねのみし泣なかゆ 我あが恋こ
ふる 千重ちへのひとへ一重ひとへも 慰なぐさもる 心こころもありやと 家いへのあたり
我わが立たち見みれば 青旗あをはたの 葛城山かつらぎやまに たなびける 白雲しらくもがく隠かく
る 天あまさがる 鄙ひなの国くに辺へに 直向ただむかふ 淡路あはぢを過すぎ 粟島あはしま
を そがひに見みつつ 朝あさなぎに 水手かこの声こゑ呼よび 夕ゆふなぎに
梶かぢの音おとしつ つ 波なみの上うへを い行きゆさぐくみ 岩いはの間まを い
行ゆきもとほり 稻日いなびつま 浦廻うらみを過すぎて 鳥とりじもの なづ
さひ行ゆけば 家いへの島しま 荒磯ありその上うへに うちなびき しじに生お
ひたる なのりそが などかも妹いもに 告のらず来きにけむ

反歌

五一〇番

白しろたへの 袖そで解ときかへて 帰かへり来こむ 月つき日をよ数よみて 行ゆき
て来こましを